

NO. 200

全仏

9 / 49



頂門の一針

弟子丸泰仙師が、フランスから連れて来た禅の修行者である一婦人が、「日本の禅をみたが、あれは形式だけだ。日本の坊さんは、ほんとうに何かを求めてやっているとは思えない。私たちは、心から求めて、禅をやっているのだ」といったそうである。

「沙石集」には、仏道修行もしないで、信施ばかり受けていた僧が、牛になった話があるが、信施の罪を滅する尊勝陀羅尼を思い出すこともできず、三日目にやっと「尊勝陀羅尼」といったとき、もとの法師に成ったという。

われわれは、今、一番大事なことを忘れてはいないであろうか。高度成長のお蔭で、立派な本堂や施設ができたが、とかく経営にのみ心を奪われ勝ちになることを戒めなくてはならない。

(R・S)

写真はソ連モンゴル仏教代表団一行に
歓迎のあいさつする桜井全仏事務総長
7月30日・東京グランドホテルで

人類の危機を救おう仏教で

第22回 全日本仏教徒会議 要項きまる

今秋十一月六日、京都知恩院和順会館において開催される第二十二回全日本仏教徒会議の要項がほぼ次のような内容に決定した。スローガンは「人類の危機を救おう仏教で」。会議内容は宗派代表者会議、仏教代表者会議、仏婦代表者会議、及びシンポジウム。特に今回の会議で中心になるのはこのシンポジウムである。最近特に人口問題等、人類の未来に対する悲観的展望がなされ、日本人口会議並びに世界人口会議が相次いで開催されるなど各方面での研究が進んで

いる。その中で一番遅れているのが宗教界、そしてわが仏教界である。既報のごとく全仏では八月二十六、七の両日、日本仏教文化会議において「人類の未来と仏教」のテーマのもとにシンポジウムをもったが、この成果を現実の布教伝道担当者たる僧侶に理解を得るべく今回の代表者会議のシンポジウムを計画した。そのテーマは「人口問題と仏教」である。趣旨について文化専門委員長真深義貫師につきの解説をいただいた。

人口問題と取組む

解説

昨年、全仏結成二十年記念に開催した第二十二回全日本仏教徒会議は、従来の大会形式から会議中心主義に変更して宗派代表者会議、地域仏教会代表者会議、それに五部会の問題別会議を平行して実施したが、いずれも「人類の危機を救おう仏教で」というスローガンに即した議題を取り上げての討議に集中した。な

かでも宛も「世界環境年」に相当していただけに、今日置かれている環境は、人類を滅亡させるかも知れない危機を招いていることに強い関心を払いつつ認識を深め、これから脱するためのテクノロジ・アセスメントあるいは環境アセスメントに仏教徒は何を為すべきか、または何ができるかを討議した。

実践項目として寺院周辺の緑化運動、寺院を市民の休息場とする運動、更には福祉事業への積極的参加などの一般的な運動の展開が取り上げられた他、市民運動の指導的な役割を担うことや人間尊重の精神昂揚を中心とする伝道の強力な展開などの申合せが行われた。必ずしも申合せが忠実に実施されているとは言えないまでも、仏教徒が今日の危機感と不安な人間の状態に対して、仏教の精神をどのように活かすべきかの認識が深まって来たことだけは事実である。各加盟団体の施政方針にも、このことがかなり反映しているし、一般ジャーナリズムでも、あらゆる時代時代に仏教が果して来た役割を、今また新しい感覚をもってその真髓を人類の危機といわれる現代に活かすべきであるとする期待を深めている。

人類の危機感はいくつも解消されてはいない。第二十二回仏教徒会議は別記のように重ねて「人類の危機を救おう仏教で」のスローガンのもと、現代がかかえる二天困難問題の一つとされている人口問題とも取組んで仏教徒の立場を闡明し

しようとする。宛も今年「世界人口年」を迎えているだけに、この問題に対する仏教徒の立場を表明することは世界の注目するところであろう。即ち宗派代表者会議においては「人類が危機に瀕している一般的状态の分析と対策」について意見を交換し、仏教徒アピールを行なう他、一般参加者によって「人口問題と仏教」をテーマにシンポジウムを開催する。このシンポジウムの基調講演は一九七〇年六月「人類の危機に関するプロセクト」という雄大な計画を作成して研究作業を実施しているローマ・クラブの常任委員大来佐武郎経済学博士に依頼することとなっている。

なお、会議形式であるが、宗派代表者会議は、若干形式を変えて、司会者がインタビュアーの役割をも兼ね、現代人類の危機としての要因に挙げられている諸々の問題、たとえば世界環境の量的限界と行過ぎた成長による悲劇的結末について。人口増加と経済成長の相互作用について。地球の大きさと有有限性の上での人間の生存と活動の限界について。世界の中における爆発的な格差と不平等について。自己中心的・抗争的行動の阻止について。社会の成長目標から均衡目標へ方向転換に対する道徳的決意について等々に對して仏教が果し得る役割を質問の形で参加者から意見表明を求めるところを狙っている。またシンポジウムでは、人口問題が人類の未来社会に如何に重大な問題であるかを学習した上で、人口制止の具体案について仏教徒は教義上

どのような立場を取るべきかを考えることとなっている。

由来、人口問題については宗教は人口制止に対する一つのブレーキとなっている。昭和二十四年二月、マッカーサー司令部の顧問として来日した米国の人口学者W・タムソン博士が「日本の人口問題の解決は産児制限しかない」と声明した際、日本ばかりでなく、世界のカソリック団体が猛然と反対し、やむなくマッカーサーも産児制限は個人の判断に待つと、政策後退をせざるを得なかった。しかしバチカンは、去る八月二十八日からベルギーのブルッセルで開かれた世界宗教者平和会議での人口問題の討議にも、またプラレストで開かれた第三回世界人口会議にも参加して人口問題に対する関心を示している。しかし一九六八年七月に発表した「人間の生命宣言」に示されたように、受胎調節は禁欲法しか認めない立場には変わりはないようであるが、カソリック国のフィリピンでは積極的に家族計画に取り組んでいる。プロテスタントはかなり進歩的で、夫婦が合意し、夫婦と新しい生命のいずれにも害がなければ、夫婦の自由に任かせるという態度である。

宗教人口二十三億人の人口問題に対する動向は、同問題を左右する上で大きな影響力を持つが、二億六千八百万といわれる仏教徒の態度は未だ曾て明かにされることがない。この意味で、今回のシンポジウムは極めて注目されよう。十余年前アメリカで仏教文化会議が開かれた

際、アメリカ仏教徒が、どこの会議でも提起した問題は「パース・コントロールと仏教徒の態度」ということであつたが、日本仏教徒代表は、誰一人明解な意見をのべ得る者はいなかった。今や仏教徒も、いつまでも煩かむりで通れないほど人類の危機における一大重要問題となっていることに深く思いを致たさねばなるまい。

今年の仏教徒会議は、前記のように一般論としての人類の危機に遭遇した現代に、仏教を如何に役立たせるかを討究する宗派代表者会議と、「人口問題と仏教」をテーマとするシンポジウムの二つに限定し、出来るだけ多くの時間をかけて考えることとなった。今日ほど人間が危機感と不安を抱えている時代はない。超能力や予言ブームを呼んでいるのもこのことを物語る一つの現象である。予言も曾てのSF(サイエンス・フィクション)作家たちが称えたバラ色の人生ではなく、概ね人間の未来に取って悲観的なものが多い。また超能力によっては決して人間の未来は明るいものとはならない。超人が生まれるためには、人の系列のなかにより大きな、より複雑な脳を持つ新型への突然変異を必要とするが、今や人間は、不完全な多数の個体、悪性遺伝子を集積させて自然淘汰の作用をかき乱しているし、他の動物の種を滅亡させ、植物を死滅させ、自からは加速的に繁殖して不可欠な、そして限りある資源を蕩尽して、自然的生態系から離脱しつつある。

このような人工的生態系の中で、人類に果して無限の栄光があるであろうか。人間もまた自然の一部である。そして自然はあらゆるものが相互的に平衡状態のなかで共存し調和を保っているのが本来の姿である。この平衡が破られた現在一実は人間が破った生物学的平衡をどのように再調整するかが一番大切な問題である。では果してこの大事業に、仏教は何ができるのか。

このたびの仏教徒会議では単なる抽象

第十一回世界仏教徒会議

明秋バンコックで

W.F.B. 常任理事会で確認

世界仏教徒会議常任理事会は六月二十一日(二十一日の両日にわたり、タイ国バンコック市のW.F.B.本部会議室で行われた。

出席者は、ブーン会長、ミヤバラスナオ(米国)、テーティアンチュ(マレーシア)、スタンレー・ウィリアムズ(スリランカ)、それに日本側として、清胤徹昭全仏国際局長、松涛弘道国際専門委員が出席した。

課題としては、①前回韓国ソウル市で開催のW.F.B.常任理事会議事録の確認。②バングラディッシュの孤児救済についてW.F.B.各センターが支援するよう要請

的な議論は無価値である。と言っても純粋な技術的、経済的、または法律的高手段や方法のよせ集めだけでは一向に役に立つものではない。破られた平衡から正常な平衡への再調整は、政治的には勿論であるが、一番大切なことは道徳的、しかも全人類の立場に立った高度なヒューマニズムが決定的に必要であるというところである。ここにこそ仏教徒の惜みなき努力を関与させられる場があると思われる。

(真溪義貫)

する。③マララセーケーラ記念基金については、六月二十一日開催のW.F.B.ユネスコ委員会で採択、決定した事項に基づき実現をはかるよう努力する。④ルンビニ復興計画については、現在集まっている預金高は三百二十七万円余であるが、この進展状況が不明のため、早急にネパール政府に中間報告を要望し、その如何によっては、各国センターは引続き募財活動をしてもらう。

⑤バングラディッシュよりW.F.B.センター承認方要請があるので、ピスツダナンダ比丘の率いる団体を承認する。⑥フラ

ンスのパリ市に建立するパゴダについて経済的援助方の要請があるが、WFB本部としては、前例がないので、この要請は却下する。⑦テンブルトン記念財団受賞候補者にブーン会長を推せんする。⑧日本側のWFB役員として同副会長に岸信宏師、常任理事に神田寛雄師を推せん決定した。⑨WFB各センター現況把握については、後日質問書を各センターへ送りその報告に基づいて作製する。

⑩印度国内で仏教徒差別待遇がなされている報告については、WFBユネスコ委員会へイワケ教授に一任する。⑪第十一回世界仏教徒会議は、韓国側の要請でバンコックで開催と決まり、明一九七五年十一月二週目あたりに開かれる予定。なお第十二回大会は韓国で開催する事を



シンポジウムで講演の小松左京氏

了承した。⑫明秋のWFB大会と平行して行われるWFB二十五周年記念行事の一環として、記念切手発行の図案に、仏旗と法輪を入れる事に決定。⑬台湾問題については、きわめて政治的に微妙なところから、その善処方の意見をタイ国外務省に問い合わせた上で態度を決める。⑭WFBY(世界仏教徒青年連盟)を引

続き支援するが、一部役員の変更が望まれる。⑮WFB本部の運営報告を常任理事会で打なう。⑯WFB婦人連盟設立については保留する。以上
なお、この会議に先立って、六月二十日にはWFBユネスコ委員会が、同じ場所で開催され、日本側ユネスコ委員として、村野宣忠国際専門委員が出席した。

「人類の未来と仏教」 日本仏教文化会議

シンポジウム 箱根で開く

八月二十六日、二十七日箱根仙石原の湖尻富士見荘において「人類の未来と仏教」(第一回)というテーマのもと、日本仏教文化会議が行われた。

この日本仏教文化会議は昭和四十三年に「アジア開発と仏教」をテーマに第一回が行われてから「生命科学と仏教」に続いて今年まで七回開催されたことにな

る。きわめて今日の重要なテーマのもと有意義なシンポジウムが、毎年行なわれ、参加下される諸先生方も熱心に討議をかかわされている。

ことしは「日本沈没」の作者でもある

作家の小松左京先生に「人類の未来と宗教」、東洋大学教授で文化専門委員でもあられる金岡秀友先生に「仏教の未来観について」、と基調講演をお願いした。

参加下された諸先生も例年より多く二十六人の方の御出席を得、傍聴されるオブザーバーの方々も例年より多かったことは、テーマである人類の未来について仏教は如何にあるべきかを問わずにはいられない、語り合わずにはいられない熱意の表われであると関係者一同喜びに堪えなかった。これを基点として仏教者が更に人類の未来に向けて光明を見出すべく前進していくことである。

お寺に仏旗をかかげよう

大 だて 150C—よこ 247C ¥13,000円 小 70C—100C ¥ 3,000円品切
中 90C— 135C ¥ 5,000円 手旗 35C— 50C ¥ 1,500円

別染製 堅牢 (全日本仏教会制定意匠登録済)

各地区仏教会でまとめて御注文の際は価格の御相談に応じます。

財団法人 全日本仏教会

111 東京都台東区西浅草1-5-5

電話03・843・6341~3

全仏輪袈裟

こげ茶、法輪マーク付き

¥一、二〇〇円

病理と臨床

…二つのことがらを通して…

若 林 隆 光

去る七月二十七日・二十八両日、日本印
度学仏教会の第二十五回学術大会が東
洋大学に於て開催された。十一の部会に
分れ、実に四百三十名に及ぶ研究発表が
行なわれた。正に学会空前の盛事であり
同慶の至りにたえないと共に関係された
方々のご労苦に対し心から感謝するもの
である。

一方同じ七月二十七日夜、NHKテレ
ビはシリーズ番組「皆で語ろう」に「葬
式」を取上げ、葬式のあり方、香奠の功
罪等から戒名(料)是非が論ぜられたと
いう。出演者は主としてこの問題につい
て投書した一般人(二百余通の投書があ
った由)と葬儀屋さん及び数名の僧侶か
ら構成され、助言者として武蔵野女子大
の花山勝友氏が大学教授の資格で出席さ
れた。筆者は視聴しなかったので又聞き
の判断を出ないが、僧侶側の顔勢は眼を
おおわせるものがあり、鈴木健二アナウ
ンサーの挿擧にも似た司会ぶりに対し、
わずかに救いとなったのは助言された花

山氏が仏門出身であったことであつたと
いう。

学術大会とNHKの番組相互は何の関
連も無く行なわれたことは言うまでもな
い。しかし前者が明治維新の廃仏棄釈以
来、天下暗れて学会連合中最も活発とい
つてよい研究成果を発表している他方、
後者では僧侶たちが必ずしも指導的役割
を示してはいなかった事実は、今日われ
われ仏教徒の置かれている状況を象徴的
に、しかも正確に反映しているものとい
つてよいのではなからうか。ある仏教新
聞は番組を選んで出演すべしと警告して
いたが、その論が時宜を得たものである
にせよ、この対照の象徴性は些かも減ず
るものではない。

更に併せ考えられるものに、近來常に
読書界に潜在する仏教ブームがある。
そしてそのブームは決して仏教のブーム
ではなく、反って社会全般の仏教飢餓状
態への警告であつて、一般僧侶個人は夫
々それなりの活動努力をしているにもか

かわらず、次第に仏教について、主役から
脇役に転じつつある事実である。

ここで思いは自然と医学に導かれる。
医学に於て病理中心の基礎的な面と、臨
床中心の応用的な面が車の両輪となって
併行していることは、今更いうまでもな
い。そして医学と病氣、医師と患者を媒
介し自らもその両面を備えて進んでいる
ものに薬学がある。そして今日「医は算
術」というような言葉をきかないわけ
ではない。にもかかわらず医師に対する信
頼、薬剤に対する文字通りの信用は過度
ともいえる程であり、医師の社会的地位
の高さは大学医学部の入試競争率の高さ
が証明しているといつてもよからう。若
者たちが敢て一割の不利を顧みず、丸
儲けを捨て、九層塔に赴くのは、単な
る冒険心以外の何ものかがある。

勿論明治以来の教育が、仏教排斥、宗
教軽視の方針の下に行なわれたことが、
今日の状況に導いたこととは否み得ない。
全ての国民が通過せざるを得ない義務教
育の教科書から、一切の宗教心の萌芽と
なり得るものを摘み取つておいて、日本
人の宗教心の有無を云々するのは正に本
末顛倒である。信教の自由とは、信教が
存在する場に於て意味ある言葉である。
一切の食糧が存在しない砂漠の唯中で人
は食事を選択することは出来ない。また
食糧の存在し得ない不毛の砂漠に人を置
いて、食事を取るも取らぬも自由である
というのは人を愚弄するものというべき
であろう。このことはいくら声を大にし
て叫んでも声が大きすぎることはなく、

いくら繰返しても繰返し過ぎることはな
い。しかし仏教者の立場としてはこれで
足れりとするべきものではないこともまた
いうまでもない。

病理の研究は如何に進歩し、先行して
もそれだけで病氣を絶滅するわけにはい
かない。現実の患者にあてはめ、薬学の
知識を援用し、適切な看護が行なわれて
はじめて治療の実が上るのである。むし
ろ一見純客観的な分析に終始するかに見
える病理の研究は、病の器としての人間
全体に対する見通しがあつて始めて成立
つともいえるのである。あらゆる学問に
於て今日程細分化がいわれられていること
はない。また隣接部門の進展は大まかな立
言を許さなくもなっている。細分化は近
代科学研究の辿るべき運命とさえ思われ
る。にもかかわらず、仏教と仏教学の関
係に於てはいま一つの配慮が望まれるの
ではなからうか。仏陀のいましめられた
戲論の分野も、仏教学としては顧慮すべ
き範囲に入るものと認められる一
方、本来戲論でなかった筈のものが、中
論にいう見論の戲論的に論ぜられている
ことは無いであらうか。問題の本来の意
味を洗い直し、大きな流れの中に位置づ
けていくことへの戒心を忘れてはならな
いであらう。

他方臨床医の立場にある一般寺院僧侶
は、与薬の薬礼の徴集に堪能な面だけが
取上げられ、応病であるか否かについて
自他の関心が薄れつつある点こそ問題で
ある。医師にも名医も数も健保の点数は
同じという難点はある。しかし医師、病



あいさつするソ連の仏教会会長

院に対する選択の自由は、僧侶、寺院に
対するそれよりも遙かに高い。そして医
師には学位の表示について制限があるの
に、僧階については表示の制限どころか
世人は僧階の無意味さについてよく知っ
ているという他ない。そして横行するの
は、医学の進展を無視した所謂めくら医
療ということになれば、砂漠の民は飢え
や渴きを何処にいやしたらいよいよとい
うことになるか。
譬喩が全分をおおうものでないことは
言うまでもない。しかし日本人の全てが
患者もしくは患者になりつつあるともい

ソ連・モンゴル仏教代表团

来 日

歓迎レセプション

日本仏教徒有志(仏教徒平和の会、日
本山妙法寺)の招待で来日したソ連・モ
ンゴル仏教代表团一行七名の歓迎会が、
全仏と日本側歓迎委員会共催のもと、さ
る七月三十日、竣工なった東京・ソート
ービル内の東京グランドホテルで開催さ
れた。(表紙写真参照)

来日したソ連・モンゴル仏教代表团は
ハンボラマ・ゴンボエフ・ソ連仏教会
長、ラマ・ガルマジャローフ僧正、デリ
コフ教授、シャグダローフ夫人、トルカ
チヨフ教授(以上ソ連)、オソロ僧正、
パートルドリー氏(以上モンゴル)の七
名で、日本側からは、岩本勝俊曹洞宗管
長、桜井大乗全仏事務総長、浅井堅教豊

える今日、同日に行なわれた一見無関係
にも思われる二つの事象は、その対照の
妙に於てわれわれに何等かの反省を促す
契機となり得るし、またなすべきものと
考えられる。より深く、より広く、より
高い立場から、更に触れるべき問題点に
ついて読者諸賢の御教示にあずかること
が出来れば、貴重な紙面を汚した若
輩の妄語の罪も幾分か軽減して頂ける
のではなからうかと、恐れおののきつつ
筆を擱く次第である。
(西光院住職・全仏文化専門委員)

山派宗務総長、貝山宣泰神奈川県仏会
長、木村光頭静岡岡県仏会長、中山理々仏
教鐘仰会理事長ら七十余名が出席した。

歓迎会は、壬生照順師の司会で始まり
桜井全仏事務総長の挨拶、浅井堅教師の
発起人代表歓迎のことは、岩本管長の来
賓挨拶とそれぞれ歓迎の意を表わした。
これに答えて、両国代表がそれぞれ
「今度の訪問を機会に、今後両国代表団
の往来をはかり、相互理解、連帯の強化
されんことを望む。日本と同じ大乘仏教
をいただく仏教徒として、人類福祉と世
界平和のために手をたずさえて前進する
よう努力しましょう」と挨拶し、互いに
友好と人類平和を誓い合った。
そのあと、席をあらためて歓迎の宴が
催され、和やかな雰囲気の中に歓談が
つづいた。

代表团一行は、七月二十四日に来日し
て以来、箱根、京都各山、東京各山を参
拝し、三十一日にはNHKテレビに出演
するなど所期の目的を果して、八月五日
に帰国の途についた。

第二回世界宗教者

平和会議開かれる

ベルギーのルーベンで


世界宗教者会議(WCRP、アンジェ
ロ・フェルナンデス大司教)では、八月
二十八日から九月三日まで、ベルギー國
ルーベンにて、「宗教と人間生活の質」
を基調テーマに第二回世界宗教者平和会

議が開催された。その主な論点および提
案事項は次のとおりである。

一、基本原則

各人の発言は、正義と平和を希求する
宗教者として、各人の持つ信仰と良識に
基づくものであり、宗我および国益にと
らわれない。第一回世界宗教者平和会議
における決定事項を前提として、さらに
具体的、実践的課題に取組む。日本委員
会として共通の了解事項および提案事項
のある場合は、参加者相互に発言および
動議を支持する。

- 二、非武装と安全の保障について
- 三、開発と人間の解放について
- 四、人権の確立とその方策について
- 五、人間環境と人類の生存について

全仏推奨 安全焼香台 (屋内用)
線香(ローソク)完全燃焼器 (墓地用)
お寺を火災から守りましょう!!
線香(ローソク)完全燃焼器(墓地用)でお寺も檀家も
みんな揃って一安心! 安全焼香台(屋内用)もあります。
製法 実用新家公告 34188号
製品 実用新家特許 出願受付 昭46-92325号
ご一報下されば直ちにカタログを送付致します
特約店募集中
(〒460) 名古屋市中区大須3丁目39番33号
全国総発売元  合資会社 梅金商店
TEL 名古屋<052>241-0901代

世界の主要宗教の指導者がこのような規模において一堂に会し、世界平和の具体的課題について討議を行う事は、ヨーロッパの宗教史上まさに未曾有の事であつて、会議開催国ベルギーでは、フアビオラ・ベルギー国王妃を最高顧問に推戴し、レオン・ヨセフ・スーネンス枢機卿（ベルギー国首座大司教）を委員長に、キリスト教、ユダヤ教、イスラム教の各代表者、およびジョン・レイ前ECCC会長、ビエール・ハーメル上院議長、アンドレ・デキュー下院議長、エドワール・マッソーおよびピーター・ド・ソマーの両ルーベン・カトリック大学学長等を以て構成する受入委員会を組織して、世界会議の諸準備にあつた。八月一日までに参加登録をすませた参加者は、四十六カ国、三百余名である。

伊東で関東甲信越静 ブロック会議

去る五月二十九日、三十日の両日にわたり、静岡県仏の担当で伊東市ホテル「ニュー東海」にて関東甲信越静ブロック会議が開催された。

参加者は、小峰順善・郡司博道（東仏士持良栄・月間照孝・熊野明夫）千葉県

（貝山宣泰・小崎竜雄・小沢省元（神奈川県仏）、北之内真竜・小出秀峰（埼玉県仏）、稲木宏済・高木敏了・岩田定憲（栃木県仏）、井村胤広・安藤惟光（山梨県仏）、村木祐英・丸山宗隆（長野県仏）、土田真也（新潟県仏）、木村光頭・伊藤義道・小原良碩・長岡隆典・松村寿頭・佐々間真忍（静岡県仏））とで充実した討議がなされた。

会議は、貝山師を議長として「一、昭和四十九年度全日本仏教徒会議について」日時、会場が既報の通り今年十一月六日、京都・和順会館に決定した旨、全



伊東のホテルで記念撮影の一行

仏事務局より説明がなされ、これに対しブロック各県は積極的に協力する事が約束された。「二、時局対策について」はやはり既報のごとく全仏税制特別委の努力がみのり、法人税法の一部改正にこぎつけた事が全仏事務局より報告説明がなされた。また「靖国法案について」は、問題が大きいため、既報の全仏の声明文をもって説明とされた。次に埼玉県仏より関東宗教学実務研修会につき協力方のお願いがなされ、それについで各県仏より四十八年度の行事報告、四十九年度の行事計画が報告説明された。

最後に、全仏事務局より当ブロック会議の担当予定案が発表され、来年度は神奈川県仏の担当で開催されることに決定した。なお、それ以後の担当予定案も一応の了解を得たのでそれにしたがって開催されると思われる。

盛岡でひらかれた 東北ブロック会議

去る六月七、八の両日、岩手県仏の担当で東北ブロック会議が盛岡市つなぎ温泉「御所会館」で開催された。

岩手県仏副会長の熊谷隆正師を議長に「一、昭和四十九年度全日本仏教徒会議について」、全仏事務局より日時、会場が本年十一月六日、京都・和順会館に決定した旨説明がなされた。「二、時局対策について」、法人税法の一部改正にこぎつけた経過報告が、全仏事務局と税制特別委副委員長の郡司博道師からなされ

た。また「靖国法案について」も全仏事務局から声明書の発表にいたるまでの経過が説明された。なおブロック会議の出席者は次の通りである。

- 山形県仏板垣隆寛（副会長）、同板垣亮忠（庶務）、福島県仏岡部玄（事務局長）、岩手県仏松尾正真（会長）、熊谷隆正（副会長）、豊春宗雄、工藤道夫、加藤順底、沢沢信一、中野正興、熊谷安祐、松見得忍、黒沢有光、高橋雄仙、上館馨文（以上理事）の各師。

また会議に先立って、宗教学人の税金についての講習会が開催されたが、それにつき岩手県仏の熊谷会長より次のように報告された。

岩手県仏では東北ブロック会議開催を機として全仏後援の下に講習会を左記により開催しました。

1、期日、昭和四十九年六月七日（金午後一時〜三時）
2、会場、盛岡市名須川町三一五 報恩寺
3、講師、講題「宗教法人の税金について」
◎全日仏税制特別委員会副委員長 東京都仏教連合会事務局長 郡司博道師
4、参加資格者、各宗寺院住職又は代理者
当日は県下寺院住職又は代理者、百五十名参講、熱心な聴講風景の中にも、珍問続出。有意義な楽しい和の会場でした。これを契機として全一仏教運動推進を願った次第です。

昭和49年9月1日

「生命科学と仏教」 紀要(その三)を刊行

昨年八月開催した日本仏教文化会議「生命科学と仏教」シンポジウム(第三年次、完結)の紀要がこのほど刊行された。

内容は、東大教授野田春彦氏の「生物としての人間の本性」東大名誉教授宮本正尊氏の「仏教からみた人間の本性」が収録されている。
B5版二六七頁。希望の向には頒布するので全仏文化部あてに照会しよう。

哀 悼

長岡 慶信師(真言宗豊山派元管長、全仏元副会長)

七月二日、東京田端の自坊与楽寺で老衰のため逝去、八十五歳。師は群馬県出身、児童教化、宗教々育活動は著しく、三十四歳で宗会議員当選、以後、昭和二十年から三十八年まで東京仏教団理事長をつとめ、昭和四十年に同派管長、長谷寺化主となる。また昭和四十二年、全仏副会長に就任、全一仏教運動に多大の功を残した。

羽溪 了諦氏(電大元学長、全仏元副会長)八月十三日、京都第一赤病院で心筋こうそくのため逝去。九十歳。氏は京大哲学科卒業後、インドに留学、大正十年電大教授となり、以来、京大教授

大学長と歴任。西域仏教の権威。また氏は昭和三十八年、全仏副会長をつとめ、現在財団法人仏教伝道協合理事長にあつた。

事務総局録事(七月・八月)

- 三日 仏青設立準備会に出席(仏教伝道センター)
- 十一日 東京本願寺別院藤井輪番歓迎会に出席
仏教讃仰会の「都民お盆まつり」に出席
- 十三日、十六日 盆休
- 二十二日 局内会議
- 二十四日 ソ連・モンゴル仏教代表団出迎え(羽田)
- 二十七日 ソ連・モンゴル仏教代表団歓迎(京都堀川会館)
- スリランカ訪問団見送り
- ソ連・モンゴル仏教代表団歓迎(東京ソートービル)
- 三十日 (八月)
五日 日蓮宗法主就任並びに管長帰国祝賀会(帝国ホテル)
- 七日 全日本仏教徒会議打合せ
局内会議
- 十三日、十六日 盆休
- 二十三日 全仏創立記念日
関西事務局訪問
- 二十六日、二十七日 日本仏教文化会議
二十六日 局内会議

●八月号は都合により休刊しました。

昭和四十九年九月一日発行
九月号 第二〇〇号

発行人 榎井大乗
編集人 清胤徹昭
発行所 財団法人

全日本仏教会

東京都台東区西浅草一ノ五ノ五(東京本願寺内)
電話 〇三(八四三) 六三三(四一) 三

黄金菩提樹葉



(意匠登録出願中)

成道の聖地ブダガヤの菩提樹の葉を、その自然の姿を崩さないように純金加工して美しい二重緑に納めたものです。お仏間にぜひお備え下さい。

タテ 36cm ヨコ 32cm
¥ 17,000 (送料別)
千代田トラベル物産部へお申込み下さい。

インド仏跡参拝団

印度山日本寺開山一周年記念法要団

主催 (財)国際仏教興隆協会
期間 昭和49年12月2日から 17日間
× 12月18日まで
費用 380,000円
(宿泊、食事代を始め団体行動中の経費一切を含みます)

昨年12月8日全日本仏教会法要団により落慶法要が敷修された成道の聖地ブダガヤの印度日本寺の一周年が近づいて参りました。この法要団はその開山一周年記念法要に随喜し、六天仏跡参拝とカトマンズ(3泊)、アグラ、デリーを訪ね、帰路バンコックに一泊します。
お申込みは早目に千代田トラベルへこのほか11月以降2月まで毎月インド仏跡参拝団がございます。

運輸大臣登録一般154号

株式会社 千代田トラベル

CHIYODA TRAVEL, INC.

東京都港区南青山5丁目6番20号
〒107 (千成ビル)
TEL. { 407-3612 (代)
400-5100